徳島大学総合科学　人間科学研究
第1巻（1993）13－22

スポーツ選手育成とその援助体制に関する調査研究：国体選手のスポーツキャリアの特徴と援助者の関係

佐藤　充宏，三浦　　武，生田　豊

CHARACTERIZATION OF SPORT CAREER IN ATHLETES AND IT'S RELATION TO SUPPORTERS

Mitsuhiro SATO, Takeshi MIURA and Yutaka IKUTA

SUMMARY

Relation between athletes and their supporters have been studied to improve management method for continuing sport career. Sport career pattern of athletes participating in the 1992 National Athletic Meet (Yamagata) form Tokushima prefecture is classified into continuing type and transfer one. Of 211 athletes examined, 103 athletes (51.2%) are continuing participants in Japanese major school sports such as baseball, soccer, track and field, volleyball, and so (continuing type). They started their sport career at stage of elementary school. Other athletes (48.8%) are transfer participants in minor school sports such as hockey, wrestling, kyudo, and so (transfer type). Most of them transferred from major school sports to minor ones during stage of senior high school. In both types, instructor/coach is most important factor in continuing sport career among supporters for athletes, especially during stages of junior and senior high schools. Parent(s)/family is also important for preadolescent athletes and friend/colleague for adolescent ones. Therefore, besides roles of instructor/coach, the management method for continuing sport career should be improved in consideration on roles of other supporters.

key words: sport career, amateur athletes, supporters

緒　　言

近年，日本体育協会や日本オリンピック委員会はスポーツタレント発掘のシステム開発の研究に注目している[3,5,11]。これは，ジュニア期からトップ選手に至るまで一貫した指導方針によって長期的視野に立ったスポーツ選手育成が重要視されるようになったことを示してい

*徳島大学総合科学部人間社会学科　スポーツ科学教室
*Department of Physical Activity Sciences, Faculty of Integrated Arts and Sciences The University of Tokushima, Tokushima 770, JAPAN

る。このような研究が注目されるようになった原因として，次の二つがあげられる。

一つは，スポーツ選手の育成における輪切り的指導体制の弊害である。これはスポーツ選手のバーンアウト症候群（burnout syndrome）やドロップアウト（dropout）という現象に代表される年少選手の早期専門化，完成化が原因であると指摘されている[1,4]。スポーツ選手育成の中心である学校運動部では，学校を枠にした指導育成体制は組めても，学校外の地域スポーツ育成にまで関係することは少ない。指導者は選手に対して学内での目標に徹底することを要求する。そのため，地域における縦の連携（小学校-中学校-高校-社会という連携）と横の連携（同地域のスポーツ組織間の連携）には消極的である。スポーツを継続しようとする選手たちは進学の度に，指導方法や指導理念の異なるスポーツ環境に適応し，競技力向上に努めなければならないのが現状である。

二つめは，育成システムの中心となる学校運動部の育成役割の二重性である。学校運動部は学校教育における特別活動の一貫である「生涯スポーツの教育」の側面と，各種競技団体の選手育成を支える「競技スポーツとしての選手育成」の側面を混在させていることが原因である。多様な目的をもって入部する学生を指導するには，指導内容の多様化が要求される。しかし，このことは指導者に指導理念の選択を迫り，現実にはどちらかに偏重した指導がなされている。また学校5日制の導入によって，これまで行われてきた学校運動部の運営の転換を迫られ，学校運動部の役割の再認識が問題となっている。

しかしながら，学校運動部におけるスポーツ選手育成は，現在でも日本の競技選手育成の中心であり，重要な選手発掘と育成の場として位置づけることができる。なぜなら，生徒にとって学校運動部とは一番身近で環境条件が整いスポーツ活動が保証されている場だからである。このような学校運動部の問題を解決する方向から，学社連携の地域のスポーツ選手育成の基盤をつくるにはどうしたらよいだろうか。一つの事例として，愛媛県南宇和地域でのサッカー育成システムがあげられる。南宇和高校のサッカー部を頂点とした指導育成システムは地域指導者の連携と共通理念の形成から成功した例といえる[10]。このように，学校の枠だけにとらわれたスポーツ活動の発想ではなく，スポーツ選手の発掘，育成という側面も備え，地域に根ざしたスポーツ選手育成システムのあり方を開発していくことが，今後の重要な課題である。

そこで我々は育成システムの組織化の上で重要な援助者（指導者，親を含む家族，先輩，同僚を含む友人）の役割に注目したい。なぜなら，地域での選手のスポーツ活動継続の要因は技術指導上での指導者の連携だけが重要ではなく，指導者も含めた選手のスポーツ活動の援助者の連携が必要だと考えるからである。指導者には見えない選手の諸問題に対して援助してくれる，家族，先輩，友人の存在を見落としてはならない。

また，指導育成の仕組みを考えていく上で重要なことは，選手の側に立ったライフサイクルを念頭に置いたプログラムの開発である。そのため，選手のスポーツキャリアをパターン化し，過去から現在に至った経過を分析する方法を使用する。これはスポーツ選手の生活やライフステージに関わる問題や課題を明らかにする上で有効な手法として注目されている[2,6,10]。海老原（1991）はドロップアウトに関する研究の中で，Lindner（1991）の提唱するsampler dropout, participant dropout. trasfer participant, transfer drop-out を考慮してキャリアパターンを検討することが重要であることを指摘している[4]。

そこで本研究では，競技スポーツを継続してきた徳島県国体選手211人にスポーツキャリ

アと援助者の状況について調査する。そして，そのスポーツキャリアを指導育成という観点から二つのパターンに分類し，それぞれのキャリアの特徴と援助者の関係を明らかにする。これら二つの結果から，地域での一貫指導育成における援助者の役割についての基礎的資料を得ることを目的とする。

方　　法

1. 調査対象

第47回の夏期および秋期国民体育大会（山形）に参加した徳島県国体選手211名（全参加者選手の44.2%）。対象者の性別構成は男性が157人（74.4%），女性が54人（25.6%）である。年齢構成では，中学生(12～15歳)が7人(3.3%)，高校生(16～18歳)が107人(50.7%)，大学生・社会人（19歳以上）が97人（46.0%）である。

2. 調査方法

質問項目の検討は関連する先行文献[7,8,12,14,17,19,20]より抽出した30項目でスポーツサークルに所属する学生60名を対象として予備調査を行った。その結果を検討し現在までスポーツ種目を継続してきた要因の中で重要と思われる以下の五項目を決定した。

①現在のスポーツをやり始めた動機，②周囲の人の支援・援助，③選手にとって重要な時期，④影響を受けた指導者，⑤競技歴からみた辞退意識の時期と原因の五項目である。

①③④⑤の項目の時期的な質問とその内容についての質問では該当する項目全てに回答させる重答方式を採用している。

この質問紙を対象者に配布回収し，以下の分析枠組みに従って分析し考察した。

3. 分析枠組み

本研究では，国体選手の現在まで競技スポーツ経験を，小学期(6～12歳)，中学期(13～15歳)，高校期（16～18歳），大学・社会人期（19歳以上）の四時期で分け，それぞれの時期において継続的に参加していたスポーツ種目の変動をスポーツキャリアと定義し使用した。特にキャリアのパターン化では，指導育成上，重要と思われる開始時期と種目間移動に重点を置き以下の二つのパターンに分類した。

①同一種目継続型パターン（小学校期からその種目を続けていて現在に至った選手）

②他種目転向型パターン（他の競技種目から転向して現在に至った選手）

この同一種目継続型パターン（以下，継続型）と他種目転向パターン（以下，転向型）という二つのキャリア特性に分類した理由は，種目転向による問題や長期の同一種目継続による問題を明らかにできるのではないか，また，各パターンごとに援助者の関係に違いがあるのではないかと考えたからである。

分析はこのキャリアパターン別にクロス分析を行い，χ^2検定を施した。有意な差のあった内容ではχ^2値，自由度（df），有意差判定を示した。

結　　果

1. キャリアパターンの特徴

本研究の対象者を二つのキャリアパターンで分類した結果，継続型が103人（51.2%），転向型が98人（48.8%）であった。この継続型と転向型の特徴を明きらかにするために，キャリアパターンと性別，年代，競技レベル，競技種目ごとのクロス集計をした結果，表1のよ

表1　継続型と転向型の性別，年齢，競技レベル，競技種目の比較

	継続型 N	(%)	転向型 N	(%)	χ^2値	df
全　体	103	(51.2)	98	(48.8)		
男　性	72	(69.9)	78	(79.6)	2.49	1
女　性	31	(30.1)	20	(20.4)		
13～15歳	7	(6.8)	55	(56.1)	15.29 **	2
16～18歳	62	(60.2)	43	(43.9)		
19歳以上	34	(33.0)	0	(0.0)		
競技ﾚﾍﾞﾙ上位	15	(14.7)	21	(22.1)	4.06	2
競技ﾚﾍﾞﾙ中位	45	(44.9)	47	(48.5)		
競技ﾚﾍﾞﾙ下位	42	(41.2)	27	(28.4)		
水泳	12	(100)	0	(0.0)	128.23 ***	30
器械体操	10	(100)	0	(0.0)		
軟式野球	8	(100)	0	(0.0)		
サッカー	6	(100)	0	(0.0)		
剣道	5	(100)	0	(0.0)		
柔道	2	(100)	0	(0.0)		
テニス	2	(100)	0	(0.0)		
なぎなた	1	(100)	0	(0.0)		
ﾊﾞﾄﾞﾐﾝﾄﾝ	1	(100)	0	(0.0)		
硬式野球	14	(93.3)	1	(7.7)		
ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	8	(72.7)	3	(27.3)		
ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ	5	(71.4)	2	(28.6)		
陸上競技	16	(61.5)	10	(38.5)		
ｿﾌﾄﾃﾆｽ	4	(57.1)	3	(42.9)		
ボウリング	4	(36.4)	7	(63.6)		
空手	1	(33.3)	2	(66.7)		
卓球	1	(25.0)	3	(75.0)		
ｳｴｲﾄﾘﾌﾃｨﾝｸﾞ	1	(25.0)	3	(75.0)		
ﾎﾞｸｼﾝｸﾞ	1	(10.0)	9	(90.0)		
ホッケー	0	(0.0)	12	(100)		
レスリング	0	(0.0)	10	(100)		
弓道	0	(0.0)	7	(100)		
ｱｰﾁｪﾘｰ	0	(0.0)	6	(100)		
漕艇	0	(0.0)	4	(100)		
ヨット	0	(0.0)	4	(100)		
山岳	0	(0.0)	4	(100)		
カヌー	0	(0.0)	3	(100)		
相撲	0	(0.0)	2	(100)		
自転車	0	(0.0)	2	(100)		
銃剣道	0	(0.0)	1	(100)		
ﾌｪﾝｼﾝｸﾞ	0	(0.0)	1	(100)		

** $p < .01$　*** $p < .001$

うになった。これらのクロス集計の χ^2検定を行った結果，有意差がみられたのは年代である。($\chi^2=15.36$　df=3　$p<.01$)。

特に種目について比較してみると，継続型の競技種目は，水泳，器械体操，軟式野球，サッカー，剣道等，小学期からそのスポーツに身近に接することのできるスポーツである。反対に，転向型ではホッケー，レスリング，弓道，アーチェリー等，ふだん接する機会の少ない中学・高校期以降のスポーツが中心となっている（$\chi^2=128.23$　df=30　$p<.001$)。

転向型選手の転向前の種目は，小学期は「軟式野球」(39.7%)，「サッカー」(14.7%)，「陸上」(13.2%)の順で多く，中学期は「軟式野球」(17.9%)，「陸上競技」(17.9%)，「バレーボール」(11.9%）の順で多い。転向した時期では，「高校期に入って」(62.2%)，「中学期に入って」(38.8%)，「大学・社会人期に入って」(15.3%）の順である。

2.　現在のスポーツをやり始めた時期と動機

やり始めた時期においてキャリアパターン別に比較をした。継続型は小学期が80.8%，中学期15.2%，高校期3.0%，大学・社会人期1.0%とほとんど小学期に集中している。これに対して転向型は小学期0.0%，中学期19.4%，高校期が64.3%，大学・社会人期が16.3%で高

校期が一番多い（χ^2=148.59　df=4　p<.001）。

動機の全体的な傾向をみると「家族や知人にそのスポーツをしている人がいて誘われて」というのが最も多く37%の選手が回答している。これは身近なスポーツ行動者の誘引によるものが大きいと考えられる。しかし，次に多い項目をみてみると，継続型では「そのスポーツが好きだから」（22.3%）で，転向型では「指導者に勧められて」（21.4%）であった。これは転向型の選手がその種目の指導者や学校という活動の場と出会って転向の決意したと考えられる。しかし，その関係は統計的には有意差がなかった（表2）。

3. 選手育成で重要な時期と援助者との関係

図1に示すように，重要と考えている時期は「高校期」，「中学期」の順である。キャリアパターンで比較すると中学期では転向型より継続型が14.7ポイント多く，逆に大学・社会人

表2　現在の競技を始めた動機

動　機	継続型 (N=103) %	転向型 (N=98) %
知人家族に勧められて	36.9	36.7
そのスポーツが好きだから	22.3	14.3
指導者に勧められて	16.5	21.4
学校授業部活動	6.8	13.3
スポーツ教室クラブ	8.7	3.1
試合をみて	2.9	5.1
有名選手へのあこがれ	5.8	2.0
漫画やドラマなどの影響	1.0	0.0
その他	13.6	10.2

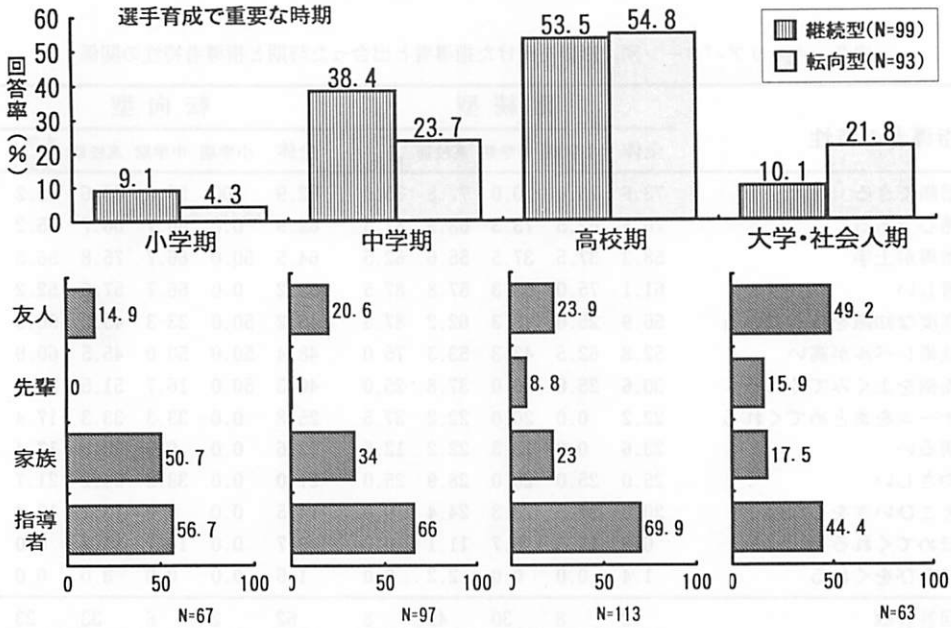

図1　選手育成で重要な時期の判断と各時期の援助者との関係

期では継続型より転向型が 12.1 ポイント多い（χ^2=13.15　df=4　p<.05）。

援助者の変遷を全体的にみてみると，小学期では回答者の約半数が「親・家族」と「指導者」としているが，中学期，高校期では「指導者」が約 7 割を占める。大学・社会人期では「指導者」が減少し，「友人」が増え両者とも回答者の約 5 割程度でになる。時期が経つにつれて「親・家族」と答える者は減少し，「友人・同輩」と答える者の割合が上昇していく傾向にある（χ^2=57.12　df=9　p<.001）。「指導者・先生」というのはどの時期でも援助者として占める割合が高い。最も高いのは「高校期」の 69.0%，次いで「中学期」の 66.3%である。

この変遷をキャリアパターンで比較してみたが，全ての時期において有意な差がみられなかった。つまり，種目の転向や継続に関係なく援助者が変遷していることが認められた。

4. 影響を受けた指導者

転向型の 64.2%，継続型の 72.0%が「多大な影響を受けた」と答えている。しかし，有意差は認められなかった。影響を受けた時期について図 2 に示した。全体的には「高校期」が特に多く，両パターンとも半数を超えている。しかし，2 番目に多い時期は継続型が「中学期」

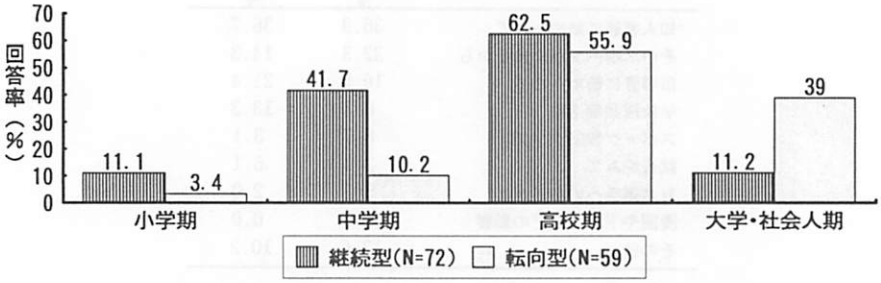

図 2　継続型と転向型の「影響を受けた指導者がいた時期」の比較

表 3　キャリアパターン別，影響を受けた指導者と出合った時期と指導者特性の関係

指導者の特性	継続型					転向型				
	全体	小学期	中学期	高校期	大学社会人	全体	小学期	中学期	高校期	大学社会人
信頼できる	73.6	75.0	70.0	77.8	75.0	62.9	100	50.0	63.6	65.2
熱心である	70.8	62.5	73.3	68.9	87.5	62.9	0.0	66.7	66.7	65.2
指導が上手	58.3	37.5	37.5	55.6	62.5	64.5	50.0	66.7	75.8	56.5
厳しい	61.1	75.0	63.3	57.8	87.5	53.2	0.0	66.7	57.6	52.2
高度な知識を持っている	56.9	25.0	43.3	62.2	87.5	45.2	50.0	33.3	45.5	56.5
技術レベルが高い	52.8	62.5	43.3	53.3	75.0	48.4	50.0	50.0	45.5	60.9
面倒をよくみてくれる	30.6	25.0	30.0	37.8	25.0	40.3	50.0	16.7	51.5	30.4
チームをまとめてくれる	22.2	0.0	20.0	22.2	37.5	25.8	0.0	33.3	33.3	17.4
明るい	23.6	0.0	23.3	22.2	12.5	22.6	0.0	0.0	30.3	17.4
やさしい	25.0	25.0	20.0	28.9	25.0	21.0	0.0	33.3	24.2	21.7
えこひいきをしない	20.8	37.5	23.3	24.4	0.0	14.5	0.0	0.0	18.2	17.4
ほめてくれる	6.9	12.5	6.7	11.1	0.0	9.7	0.0	16.7	15.2	0.0
ほうびをくれる	1.4	0.0	0.0	2.2	0.0	1.6	0.0	0.0	3.0	0.0
回答者数 (%)	72 (100)	8 (11.1)	30 (38.5)	45 (62.5)	8 (11.1)	62 (100)	2 (3.2)	6 (9.7)	33 (53.2)	23 (37.1)

(41.7%)，転向型が「大学・社会人期」(39.0%)が多く，有意差が認められた(χ^2=26.57　df=4　p<.001)。この傾向は，重要な時期と同様である。

「影響を受けた指導者のどういうところがよかったか」という質問に対して，継続型は「信頼できる」(73.6%)，「熱心である」(70.8%)，「厳しい」(61.1%)などの指導者の人間性の内容が中心となっている。転向型では，「指導が上手」(64.5%)，「信頼できる」(62.9%)，「熱心である」(62.9%)の順で多く回答しており指導技術と人間性の内容が中心となっている(表3)。しかし，統計的な有意差はみられない。

5.　辞めたいと思ったこと

「途中でやめたいと思ったことがある」と答えた割合は，継続型では64.1%，転向型では68.1%である。「辞めたいと思った時期」では継続型が「高校期」(53.8%)，「中学期」(49.2%)の順で，転向型は「高校期」(66.1%)，大学・社会人期 (22.6%) の順である (図3)。検定の結果，有意な差がみられた(χ^2=26.57　df=4　p<.001)。これも重要な時期，指導者に影響を受けた時期と重複する傾向がある。

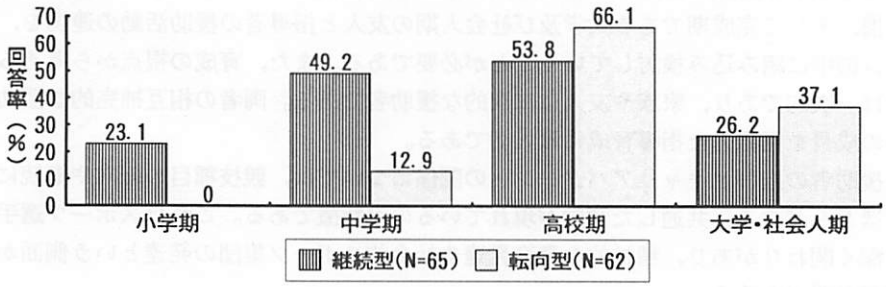

図3　継続型と転向型の「辞めたいと思った時期」の比較

表4　キャリアパターン別，辞めたいと思った理由とその時期の関係

辞めたいと思った理由	継続型 全体	継続型 小学期	継続型 中学期	継続型 高校期	継続型 大学社会人	転向型 全体	転向型 小学期	転向型 中学期	転向型 高校期	転向型 大学社会人
技術の伸び悩み	53.8	60.0	56.3	61.8	47.1	60.9	0.0	50.0	63.4	69.6
練習がきつい	38.5	73.3	53.1	41.2	23.5	32.8	0.0	100	36.6	17.4
他のことができない	33.8	46.7	40.6	41.2	23.5	29.7	0.0	37.5	24.4	39.1
けがや病気のため	24.6	20.0	21.9	35.3	41.2	12.5	0.0	0.0	17.1	13.0
人間関係のもつれ	21.5	13.3	28.1	23.5	35.3	15.6	0.0	0.0	19.5	17.4
周囲の期待に応えられない	12.3	6.7	9.4	14.7	11.8	6.3	0.0	0.0	17.1	26.1
学業不振・進学勉強	10.8	6.7	15.6	11.8	5.8	17.2	0.0	0.0	7.3	0.0
他のことに興味が移った	6.2	6.7	6.3	8.8	5.8	4.7	0.0	0.0	7.3	4.3
練習する時間がとれない	1.5	0.0	0.0	2.9	11.8	3.1	0.0	0.0	2.4	0.0
レギュラーになれない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.3	0.0	12.5	9.8	8.7
競技年齢のピークを越えた	4.6	6.7	3.1	2.9	17.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
経済的な理由	1.5	0.0	3.1	2.9	0.0	3.1	0.0	0.0	4.9	4.3
その他	1.5	0.0	0.0	0.0	5.8	10.9	0.0	0.0	12.2	8.7
回答者数 (%)	65 (100)	15 (23.1)	32 (50.8)	34 (52.3)	17 (26.2)	64 (100)	0 (0.0)	8 (12.5)	41 (64.1)	23 (35.9)

表4の辞めたいと思った理由をみてみると，「技能の伸び悩み」，「練習がきつくついていけない」，「他の事をする時間がなくなる」の順で多くなっている。継続型と転向型の比較すると，継続型の場合，時期が経つにつれ「練習がきつい」「他のことができない」の理由が減少し，反対に「怪我や病気のため」と「人間関係のもつれ」の理由が増加する傾向がある。転向型の場合，種目転向して直後の「技術の伸び悩み」，「練習がきつい」などが主な理由となっている。しかし，統計的に有意な差はみられなかった。

考　　察

1. スポーツ選手育成における援助者の推移

青木（1990）は，選手の退部に対する「友人の存在やはげましは退部を思いとどまらせるのに有効であるが決定的なものではない」と指摘している[1]。しかし，本調査結果をみる限りでは，小学期の家族，大学・社会人期の友人の援助者としての存在は選手が競技を続けていくには重要な要因であると判断できる。スポーツ選手の一貫指導育成の立場から考察して，導入期である小学期の家族と指導者の援助活動の連携，育成期である中学・高校期の指導者間の連携，そして完成期である大学及び社会人期の友人と指導者の援助活動の連携を，育成システムの中に組み込み検討していくことが必要である。また，育成の視点から考えると，指導者は一次的であり，家族や友人は二次的な援助者である。両者の相互補完的な援助活動が選手の成長を見据えた指導育成には大切である。

この援助者の推移とキャリアパターンとの関係については，競技種目の転向や継続による差異はほとんどなく，共通した傾向が現れているのが特徴である。これはスポーツ選手の社会化と深く関わりがあり，精神的な発育発達や社会的スポーツ集団の発達という側面からの再検討が必要であろう。

2. スポーツキャリアと選手育成で重要な時期

沢田，豊田（1982）は成年国体選手の調査で「現在の競技を本格的に始めようと決めた時期」は中学1年と高校1年にそれぞれ約3割程度集中していると報告している[16]。これは，継続型と転向型との現在の競技種目開始時期の差で説明できる。継続型の選手にみられるように小学期からその種目に接する機会があったものは，中学期から本格的に競技を始めている。また，転向型選手のように小学・中学期の競技スポーツから新しい種目に転向したものは，高校期から本格的に競技を始めている。

しかし，選手育成で重要な時期はどの時期かという判断では，このパターンに微妙な差が現れた。継続型の場合，高校期，中学期の順で，転向型の場合，高校期，大学・社会人期の順で重要であると答えた割合が高い。この傾向は，影響を受けた指導者が現れた時期と辞めたいと思った時期とに重なりあう。つまり，精神的にも肉体的にも成長のピークを迎える高校期は，人生の選択を迫られる時期であり精神的にも負担がかかることが多いため，指導者であり援助者であるコーチや監督の適切な指導力が要求される。

稲地，千駄（1992）は退部の中核因子として「部機能の低下」，「技能向上の停滞」，「非レギュラー」の三つを指摘している[9]。また，中込，岸（1991）はバーンアウト形成過程の要因として「病前性格」，「報われない経験」，「同一性の再確立の困難さ」，「危機様態における希薄性」の四つを指摘している[13]。これらの指摘と本研究の結果とを照らしあわせて考察すると，共通するドロップアウト要因として選手の「技能の伸び悩み」「自己実現の希薄」という

問題が明らかになる。特に，この状態は競技種目を本格的に始めた時期に起こりやすい。選手にとって指導者の現状評価は大きな影響を与えるため，指導者には打ち明けられない話の場合は他の援助者とのコミュニケーションが重要になる。高校期における援助体制は，指導者が中心となり，身体的な問題に対する援助（トレーニングインストラクターやスポーツドクター）と精神的な問題に対する援助（養護教諭や担任教師，親，学生マネージャー）との協力が不可欠となる。

また，指導者の資質として指導技能の開発も重要であるが，援助方法やカウンセリング能力なども今まで以上に重視されなければならない。他の援助者は，指導者の役割を十分理解し，指導者とのパイプ役あるいは選手の代弁者として活動できるような援助体制を整える必要がある。こうした育成システムの整備は，指導者を中心にして援助者も含めた運営スタッフの組織化から始まると考えられる[15]。

結　　論

本研究で明らかになった主な結論は次のとおりである。

1）キャリアパターンの特徴では，継続型は野球，サッカー，バレーボールといった小学期に接する機会の多い種目の選手であり，転向型はおもに高校期にはじめて接し転向したスポーツ種目の選手であることが認められた。

2）選手育成で重要な時期は高校期である。選手の競技継続には指導者は一貫して重要な援助的役割を果たしている。その上に少年期の親・家族，高校卒業以降の友人・同僚の援助も重要な役割を果たしている。よって各期における選手育成の連携が重要である。

3）選手育成で重要だと判断した時期は，指導者に影響を受けた時期，また辞めたいと思う時期と重なりあう。継続型では高校期，中学期の順で，転向型では，高校期，大学・社会人期の順で回答率が高い。本格的に競技に力を入れはじめた時期つまり高校期が，様々な面でゆらぎが起こりやすく選手援助体制を組織化する必要がある。

本研究では徳島県の国体選手を対象として調査データを分析しているため，年齢や競技種目において偏りがみられた。そのため，今後の課題として生活環境の異なる他地域の国体選手との比較調査を行い，地域間における差異を検討する必要がある。

本研究を行うにあたり，調査協力をしていただいた徳島県体育協会及び競技力向上対策本部に感謝の意を表します。また，調査全般にわたって協力していただいた徳島大学総合科学部の中安紀美子先生と学生の世古口直大君，桜本武弘君，中川剛紀君にも感謝申し上げます。

参 考 文 献

1）宵木邦男（1990）高校運動部員の退部を思いとどまる理由と部活動継続に影響する要因，体育の科学，40巻，1月号，1990，p. 65-70

2）宵木邦男(1990)一流ジュニア・コーチのキャリア，選手育成に対する意識と指導および性格特性，1990年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. IV，「スポーツタレントの発掘方法に関する研究－第2報－」，日本体育協会スポーツ科学委員会，p. 15-23

3）宵木邦男（1992）一流ジュニア・コーチのコーチ・キャリアの特徴及び選手発掘・育成に対する意見，「スポーツタレントの発掘方法に関する研究－第3報－」，日本オリンピック委員会選手強化本部，p. 23～p. 30

4）海老原修(1988)組織的スポーツからのドロップアウトに関する研究，「現代スポーツを考える」，体育・スポーツ社会学研究7，体育・スポーツ社会学研究会編，道和書院，p. 107～p. 130

5) 海老原修(1990)一流競技選手のスポーツ・キャリアの特徴に関する研究，1990年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. VI，「スポーツタレントの発掘方法に関する研究－第2報－」，日本体育協会スポーツ科学委員会，p. 8-14
6) 海老原修（1991）ジュニア・スピード・スケーターにみる継続，転向，脱退の背景平成3年度競技力向上に関するスポーツカリキュラムの研究開発，スピードスケート研究班報告－第4報－，平成3年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. V，「競技力向上に関するスポーツカリキュラムの開発研究－第4報－」日本体育協会，p. 149-155
7) 深沢　宏（1981）一流陸上競技者への社会化に関する日・加比較研究，「一流競技者の社会学」，体育社会学研究10，体育社会学研究会編，道和書院，p. 49～p. 62
8) 平松　携（1983）スポーツ指導者の役割や関わり方に関する研究，「体育・スポーツ社会学研究2」，体育・スポーツ社会学研究会編，道和書院，p. 175～p. 194
9) 稲地裕昭，千駄忠至（1992）中学生の運動部活動における退部に関する研究体育学研究，37巻，1号，p. 55-68
10) 菊　幸一（1991）中高年者のスポーツに参加する社会学的・心理学的研究，第2章－　3　中高年スポーツ参加者のスポーツ・キャリアパターン，日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集 vol. 2，日本体育協会・スポーツ科学委員会，p. 31～p. 60
11) 間野義之（1992）スポーツタレント発掘システムに関する試案－キャンディデイト（candidate）・システム－，「スポーツタレントの発掘方法に関する研究－第3報－」日本オリンピック委員会選手強化本部，p. 31～p. 36
12) 中込四郎，鈴木　壮（1985）運動選手の自我同一性の探求とスポーツ経験（Ⅰ）－Erikson の相互性からみたスポーツ経験の特徴－，体育学研究，30巻，3号，p. 249-261
13) 中込四郎，岸　順治（1991）運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究，体育学研究，35巻，4号，p. 313-323
14) 大橋美勝，安田朋則，佐藤充宏(1987)地域スポーツクラブの現状と課題，岡山大学教育学部研究集録，第76号，p. 149-181
15) 佐藤充宏（1993）スポーツクラブへの組織化，圖　琢磨，大橋美勝編著，「学校5日制と生涯スポーツ」不昧堂出版，東京，p. 119-126，1993
16) 沢田和明，豊田一成（1982）女子一流競技者のスポーツへの社会化に関する研究－第36回国民体育大会成年出場滋賀県選手を中心に－，日本体育協会スポーツ科学研究報告集「No. Ⅰ　女子のスポーツ適性に関する研究－第2報－」，日本体育協会スポーツ科学委員会
17) 山下秋二，出村慎一，多田信彦，松沢甚三郎（1985）スポーツクラブ成員の満足・不満足の構造－指導者の問題への対応化を中心として－，体育学研究，30巻，3号，p. 195-212
18) 山下立次（1993）一貫指導体制の確立，圖　琢磨，大橋美勝編著，「学校五日制と生涯スポーツ」，不昧堂出版，p. 172～p. 182
19) スポーツ安全協会（1986）地域スポーツクラブの運営に関する調査報告書
20) 第48回国民体育大会徳島県競技力向上対策本部調査研究部会（1988）「第43回国民体育大会（京都国体）徳島県監督・選手に対する調査」の分析